有意義な時間を過ごすことができました。

連携の在り方やその手段は一律ではなく、その地域ごとで作り上げていくべきものです。今回学んだことを生かしながら、環境に即した連携・ネットワークづくりを目指して活動していきたいと思います。

2013年度医療福祉連携講習会に参加して

茅ヶ崎市立病院　山内 麻由美

私は急性期病院の医療ソーシャルワーカーとして、医療と福祉の全体を見渡しながら患者の置かれている状況を理解したいと思い、本講習を受講した。多職種の方からの講義に加え、多くの施設実習があったことで、私の中に活きた資源の引き出しを増やすことができた。

地域包括支援センターの実習で、私が退院調整で関わった80代独居のＡさんのお宅へうかがった。訪問前にケアマネジャーの方から「Ａさんお手製のすっぱーいレモネードを飲むまで帰らせて貰えないから覚悟してね。」と言われた。入院中、認知症が進み、杖歩行見守りとなっていたＡさんが「１人で買い物に行った、１人で通院ができた。」と嬉しそうに報告する。そのＡさんの笑顔と、最後にＡさんの強い勧めでいただいたすっぱいレモネードの味が忘れられない。

病院では‘患者’であった人が地域では‘生活者’として活き活きと暮らしている場面を見て、慣れ親しんだ在宅で再び暮らしを整えることの意義を感じた。また退院調整の際、何もできない‘患者’と捉え、全てを整えてしまうのではなく、‘患者の持つ力’に着目した支援の在り方を関係機関と検討していく必要があると思った。

本講習での学びを活かし、患者の地域生活をイメージしながら、適切な資源に繋ぐことで、医療と福祉の隔たりを解消し、患者が地域へソフトランディングできる支援を行っていきたい。

貴重な経験の場を提供してくださった全ての方々に感謝いたします。

2013年度医療福祉連携講習会に参加して

公立学校共済組合四国中央病院　岡本健志

当院が所属する医療圏は、人口91,000人程度の小規模な医療圏です。この医療圏の中で、唯一の公的中核病院として、地域医療連携室に所属し日々業務を行っています。医療・介護・行政との連携を行う中で、以前から医療福祉連携講習会が気になっていました。今回やっと、講習会に申し込むことができました。

医療福祉連携講習会では、共通科目・医療系科目・福祉系科目を講義やグループワークで学びました。非常に広範囲の内容を講師の先生方の努力で、わかり易くご教示いただきました。各分野（医師・看護職・福祉職・行政）からの切り口で、医療福祉連携を知る事ができました。また、最終クールにあった課題講習では、「円滑な医療福祉連携のために必要なこと」を多職種の視点から話し合い、お互いを理解しまとめるワークショップを行いました。

この講習会での最大の収穫は、「実習科目」でした。どの実習先も大変お忙しい中、お時間を頂き普段の業務では学ぶ事のできない事をたくさん学ぶ事ができました。また、他の医療機関や行政から、当院がどのように求められているかを知る事ができました。

全世界が注目する2025年問題を抱える日本では、医療・福祉・行政にとって超えるべき課題が多数あります。この講習会で学んだ事を活かして、まずは当医療圏で医療・福祉・行政が協力して対応できる環境づくりを行っていきたいと思います。

『おわり』なき、医療福祉連携講習会 ～５期生になるあなたへ～

一般財団法人広南会広南病院　中村起也

神経難病患者さんの在宅療養に医師としてかかわり、医療・介護・福祉・地域の連携の重要性に気付かされた。在宅医療が日本の医療を支える大きな柱になった今日、介護や福祉の勉強をもっとすれば良かったと思う。2013年６月の盛岡の学術総会の際に、先輩である清水 博先生に、『講習会を是非受けた方が良い』と背中を強く押され、翌日、学術総会会場で講習会の申込をさせて頂いた。これが『はじまり』であった。７月に、会場・日本医科大学に集まった４期生は、物静かな集団に見えたが、一人が質問すると、次々と手が挙がり、実は『あつい！』集団だと確信した。その道をリードする先生方が講義され、仲間と議論し、知識を身につけた。受講生皆が実習を絶賛するのは、この講習会を受講しなければ、行くことも、会うこともなかったであろう人々とつながり、地域での自らの立ち位置を再確認し、新たな連携が生まれる感動を、自ら感じるからではないか。４期生同士が顔の見える連携をする事も、講習会の大きな目的の一つである。４期生の名簿を受講生で製作配布し、メーリングリストも作った。今後も業務や人生で困った際に、連携で

会場風景